

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03050

研究課題名（和文）ローマ・ビザンツ帝国期における中部地中海島嶼部の文化的変容

研究課題名（英文）Cultural Transformation in the Central Mediterranean Islands during the Roman and Byzantine Times

研究代表者

小林 功（Kobayashi, Isao）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40313580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：ともに紀元前3世紀にローマ支配下に入ったにもかかわらず、シチリア島とサルディニア島のその後の展開は大きく異なる。古くからギリシア文化の強い影響を受け、また帝国中央との関係が強かったシチリア島とは異なり、サルディニア島ではローマ化の進展は緩慢で、ギリシア文化の影響も小さかった。にもかかわらずサルディニア島では古代末期以降ギリシア文化・ギリシア語の受容が進んだ。だが古代末期における、地中海島嶼部でのギリシア文化の受容はサルディニア島だけでなく他の島嶼部にも共通する要素であり、中西部地中海の島嶼において独自の展開を示していたのはむしろシチリア島だった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中部地中海の島嶼部、特にサルディニア島は研究の蓄積が少ない分野であるが、ローマ文化やギリシア文化の受容のプロセスを分析することで、むしろサルディニア島の状況が地中海の島嶼部における一般的な状況である可能性が強く示されるとともに、シチリア島の持つ独自性もより強く意識できることになった。また古代～中世における「ローマ」概念やギリシア文化の持つ意義について、これまで以上に複眼的な観点から論じることが可能となった。

研究成果の概要（英文）： Although Sicily and Sardinia had come under the Roman rule during the 3rd century BC, later development of the two islands was significantly different. Unlike Sicily which had been heavily influenced by the Greek culture since ancient times and had a close relationship with Rome, the progress of Romanization was slow in Sardinia and the influence of Greek Culture was also very feeble until the principate. Nevertheless, in Sardinia, the adoption of Greek culture and the application of the Greek language progressed considerably during the Byzantine times. In fact, the adoption of Greek culture was common not only in Sardinia but also in the other islands of the Mediterranean. Rather, it was Sicily that showed relatively unique development in the Midwest Mediterranean.

研究分野：ビザンツ帝国史

キーワード：地中海 ローマ帝国 ビザンツ帝国 シチリア島 サルディニア島

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ローマ国家が前2~1世紀にギリシア地域の大半を支配下に収めて以降、ギリシア地域にはローマの制度や政治的・軍事的影響力が強く及ぶようになり、「ローマ化」も進んだ。だが同時に、ローマもまたギリシア文化の影響を強く受けるようになった。ローマ人にとってギリシア文化は意識するにせよしないにせよ、社会や生活のさまざまな面で不可欠な要素となっていた。

代表者と分担者が議論を深める過程で重要な論点となってきたのが、古代におけるギリシア文化の本格的伝播の西端に相当する、シチリア島やサルディニア島などの中部地中海島嶼部の状況である。シチリア島は古くからギリシア人が植民をおこない、数多くのギリシア植民市が成立・繁栄していたが、ポエニ戦争後にローマの支配下に入るとギリシア的要素は大きく後退した。にもかかわらずビザンツ帝国期になると、シチリア島は反対に急速なギリシア化が進んでいく。

一方、シチリア島のすぐ北にあるサルディニア島では、ギリシア人による植民はあまりおこなわれなままローマによる支配を受けることになる。だが先住民やカルタゴの要素が比較的遅い時期まで有力であったため、ローマ化のスピードもゆっくりとしたものであった。そしてシチリア島と同時期にビザンツ帝国の支配下に入ったにもかかわらず、サルディニア島ではギリシア化が進むことはなかった。

これまで、シチリア島にかかわる研究は11-13世紀のノルマン支配期以前に関しては、ギリシア植民市の時代からローマに併合された直後の共和政期までは若干の関心が持たれているものの、イタリア半島との文化的一体化が進んだ元首政期やビザンツ期については、研究が乏しい。またサルディニア島研究については地方史的側面が強く、ローマ帝国・ビザンツ帝国全体やギリシア文化圏との関係という大きな文脈に位置づけられてきていないうえ、シチリア島との差異や共通点に関する比較研究などもおこなわれていない。要するにシチリア島・サルディニア島をはじめとする地中海島嶼部に関しては研究蓄積が乏しく、ギリシア文化の伝播・伝統といった問題に関しても大きな関心が払われていなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、ローマ~ビザンツ帝国期の中部地中海島嶼部、より具体的にはシチリア島とサルディニア島を主な分析対象として、古代から中世初期におけるギリシア文化の受容や変容のプロセスを分析する。研究代表者と研究分担者はこれまでも、ローマ帝国の東方領域あるいはビザンツ帝国におけるギリシア文化の存続や変容に関して分析をおこなってきた。本研究ではそうした成果を踏まえ、ギリシア文化の伝播した西端であるこの二島において、どのようにギリシア文化が受容・変容、あるいは適応がおこなわれたのか、広い視野で理解を深めていくことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、必要な資料・文献の収集・読解・分析を通じて議論を深化させ、その成果を著書や論文などの形で公開していく。またその目的のため、代表者・分担者が研究会や打ち合わせなどを通じて密接に連絡を取り、相互の分析状況の理解や共有をおこなう。また必要に応じて渡欧して現地の研究者との意見交換や資料・情報収集を進めるとともに、国内においても学会・研究会での報告などをおこなってもらうことを通じて、議論・分析の視野を拡げていく。

そのため、本研究のテーマと密接に関わる、あるいは関係性を持つテーマに関する報告を学会や研究会で実施した(ただし2020年初頭からのコロナウィルス感染拡大に伴い、報告ができなかったテーマもあることを付記しておく)。また代表者はシチリア島の状況についてかなり掘り下げた分析を含む著作を刊行した。代表者と分担者は毎年3回程度(4月、7月、11月前後)研究会を実施して、相互理解を深め、議論をおこなうとともに、2017年と2019年にシチリア島、2018年にサルディニア島で現地調査を実施した。

4. 研究成果

本研究では当初の研究目的に従って、シチリア島とサルディニア島におけるギリシア文化の伝播とその影響について、分析を進めてきた。研究の結果明らかになったのは、シチリア島とサルディニア島との差異、そしてサルディニア島の「独自性」であった。

本研究を開始する時、我々はこれまでの主にシチリア島の状況を念頭におきつつ分析をすすめた。なぜならばサルディニア島と比較するとシチリア島に関する研究のほうが(「研究開始当初の背景」にも書いたように、本研究で扱う時期に関しては少ないものの、前後の時期をも含めると)多く、立脚点となりうる想定していたからである。しかしながら2018年度のサルディニア島での現地調査などを踏まえた結果、このような見通しのもとでは十分な理解が得られないという認識にいたった。その理由は地中海世界におけるシチリア島の占める位置にある。シチリア島とサルディニア島はともに紀元前3世紀にローマの支配下に入ったものの、シチリア島はローマ帝国における主要な農業生産基地として、また地中海交易の重要な結節点として、きわめて大きな意味を持ち続けた。本研究で扱う元首政期~ビザンツ帝国期においてもそれは変わ

らない。例えば 4 世紀には元老院議員がシチリア島に数多くのヴィッラを保持していたことが知られているし（2017 年度に調査したピアッツァ・アルメリーナ近郊の大規模なヴィッラ、ヴィッラ・ロマーナ・デル・カサーレはその代表である）、7 世紀にはビザンツ皇帝コンスタンス 2 世がシチリアに宮廷を移している。

このような状況もあり、シチリア島に関してはこれまでも少ないながらも着実な分析がおこなわれていたといえる。しかしながらこのことは逆に、ローマ帝国・ビザンツ帝国、あるいは地中海世界にとってシチリア島の持つ重要性が他の島嶼と比較すると隔絶して大きかったことをも示唆する。つまりこれまで我々はシチリア島をレファレンスとして分析を進めていたが、むしろシチリア島は地中海世界の島嶼部の中では独自性が強いことが理解できるようになった。

一方サルディニア島は、ローマ支配に入った後も現地住民の抵抗が長く続き、元首政期に入ってもローマ化が十分には進展しなかった。6 世紀にビザンツ帝国によって再征服された後も、中央政府から十分な関心が寄せられることは少なかった。つまりサルディニア島はローマ帝国・ビザンツ帝国の支配のほぼ全期間、「辺境部」であった。にもかかわらず、ビザンツ支配期のサルディニア島では「ローマ支配」が強く意識され、ギリシア文化もきわめて大きな意味を持っていた。たとえば島北部のトゥッリス・リビソニス（現ポルト・トーレス）に残る棺（写真）に刻まれた 8 世紀の碑文では、イタリア半島から侵入してきたランゴバルド人が「蛮族」、自分たちサルディニア島民が「ローマ人」として記述され、「蛮族に対するローマの勝利」が強く表象されている。特記すべきはこの碑文が流麗なギリシア語で記されていることである。つまり、帝国の中心が東方に移動した時期に、ギリシア語・ギリシア文化を媒介としながら「ローマ化」が進展していることが強く示されている。このような状況は、ローマ帝国～ビザンツ帝国にとっては重要な属州であり、帝国中央からの関心も恒常的に大きかったシチリア島とは大きく異なる。シチリア島も古代末期に再ギリシア化が進行したことはすでに指摘されており、同じ時期にギリシア化の受容が進んだサルディニア島と一見すると類似のプロセスが進行している。しかしながら、それまでギリシア文化の影響をほとんど受けず、ローマ化の進展も遅かったサルディニア島と、帝国中央からの関心が強かったシチリア島では、その持つ意味が大きく異なっていたのである。



写真 ポルト・トーレスのサン・ガヴィーノ教会に残る 8 世紀の棺

しかしながら、このようなサルディニア島の「独自性」は、実は地中海世界の他の島嶼とも共通するものであり、近年の研究によるとバレアレス諸島なども同様の状況にあった。また、元来ギリシア語・ギリシア文化圏であるため簡単な比較はできないものの、クレタ島などとも共通する要素を持っていたと思われる。つまりサルディニア島の「独自性」は、地中海世界の島嶼部の一般的な状況であり、むしろシチリア島の状況のほうが独自性が高い、ということが、本研究で明らかになった。

もちろん、古代末期、特に 6 世紀以降のギリシア語・ギリシア文化の復興など、シチリア島とサルディニア島に共通する要素もある。しかしながらシチリア島とサルディニア島におけるギリシア文化の受容に関してはきわめて大きな差異があり、これまで注目されることが比較的多かったシチリア島の状況がむしろ特異であること、そしてサルディニア島の状況をさらに分析することによって、古代～中世の地中海（特に中西部）の状況をより重層的に理解することが可能になることを明らかにしたのが、本研究の大きな成果である。しかし分析は緒についたばかりとも言え、今後も分析を進めていかねばならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林功	4. 巻 102-1
2. 論文標題 ローマ帝国の「後継者」になること-七世紀の地中海世界とビザンツ帝国、アラブ-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 40-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林功	4. 巻 661
2. 論文標題 ユスティニアヌス軍財務官とビザンツ艦隊	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 38-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林功	4. 巻 971
2. 論文標題 「壁」が「壁」として機能するために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑山由文	4. 巻 17
2. 論文標題 アウグスタ=エメリタの創建とその影響 アウグストゥス帝期のイベリア半島南部	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西洋古代史研究	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林功
2. 発表標題 生まれくる文明と対峙すること-7世紀後半の地中海世界をめぐって-
3. 学会等名 2018年度史学研究会例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小林功	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 生まれくる文明と対峙すること～7世紀地中海世界の新たな歴史像～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小林功のページ http://www.ritsumei.ac.jp/~ohayashi/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桑山 由文 (Kuwayama Tadafumi) (60343266)	京都女子大学・文学部・教授 (34305)	